

春燈

2017 November

11

月号



主宰の句

安立公彦

夕爾忌の朝顔ことに紺深し

炊き上がる白米の香や終戦忌

蝸の一途のこゑや迢空忌

爽涼の一湾占むる桜島

わが影を去らぬ秋蝶田原坂



久保田万太郎の句

永代の橋から海の時雨かな

「國民新聞」明治四十二年

永代橋は現在メトロが走り、夜間ライトアップをしているが江戸時代は最下流の橋であり、明治に道路鉄橋として架けなおされた。作句当時、万太郎師は二十歳。「朝顔」で文壇に登場する以前だ。掲載は「國民新聞」。はやくも「影あつてこそその形」の持論が内包されている。

この年、慶應義塾大学文学科に進み、「岡本松浜、松根東洋城について俳句のけい古」と述べている。

三代川玲子

久保田万太郎の句

松葉屋吉原の女房の圓鬚まげや西の市

『流寓抄』昭和二十七年

鎌倉に移り住んだ万太郎は、久しぶりにお西様で賑わう吉原に出かけ松葉屋に顔を出す。

息子の結婚式以来会っていない若い女将が赤い手絡の丸鬚をきりりと結び、店をきりもりしている大女将の指示で甲斐甲斐しく働いている様子が見える一句である。

あたかも新派的一幕を見ている様な気がする。

豊谷青峰

燈下集



○ 小泉三枝

引く波の蹠に夏を惜しみけり
籐寝椅子ひねもす雲と水平線
落蟬の身より重たき声を張る
滴りの音符の紡ぐ森の詩
本当の願ひは書かず星祭

○ 平野加代子

かなかなや結願の日の遠からず
バック・ナンバー揃へて灯火親しめり
相続のどんでん返し蛇穴に
銀やんま群舞国境警備託したし
テロの地より息災メール天高し

○ 田嶋洋子

天地に未来への像原爆忌
連山の一際 of 嶺秋澄めり
爽やかや林の中の学生寮
宮入の三三七拍子秋祭
折鶴にかけし年月星の秋 (祝・良子様)

○ 諸岡孝子

解夏の月一途に生きし矜恃かな
はま子逝くうすばかげろふ身の透くか (樟・尾形はま子さん)
開かれしままの歳時記秋ついでり
さやうならも又ねも交じる秋の声
遺されし句に埋もれ咲き白桔梗

○ 菅澤陽子

雪溪や小さきチャペルの大きな窓
ポンド・ペンス支払ひ迷ふビールかな
誰彼の寄りくるロビー夏炉かな
夏装うてマナーハウスのデザイナーかな
マナーハウスに一夜の贅や夏惜しむ

○ 白神知恵子

青柿を蹴つて少年目を外らす
菜虫取るのみに植ゑたるやうな畑
ひとけなき渡し場跡や盆の風
園児さへ残る暑さを言ひ合へる
みせばやの垂れに垂れ咲き紅ほのと

○ 長谷川歌子

今朝の秋からず闊歩の大路かな
灯火親し言葉飾らぬ人と居て
秋刀魚のわた好み辛党任じたり
朝涼し隣の前も少し掃く
精霊舟川面のネオン躲しゆく

○ 佐々木良玄

初秋やそばに人ゐる気配して
身に入むや贖罪の呪文夜も唱ふ
秋雲の去りゆく下を人が去る
道狭くなりゆく田道曼珠沙華
また一軒家減りし村蕎麦畑

○ 金山雅江

久に聞く父子の会講夕端居
饒舌ののちの空しさ遠花火
秋出水犬も見てゐる橋の上
夕月夜芸妓と出会ふ荒川線(雑司が谷句)
奉納の新米六俵どんと坐す(鬼子母冊)

○ 太田佳代子

新涼や家族に肌着一揃へ
父と子の釣果の鯊を揚げにけり
拭き終ふる皿を積む音秋の夜
投函す月の明かりに読み返し
秋の日や供ふる花の鮮やかに

○ 久保久子

一舟を仕立ててみたき天の川
煩惱を鎮むる呪文ばつたんこ
柴垣に遊ぶ雀や送り盆
ひぐらしや遊郭跡の水溜り
気を入るる匠の手際菊日和

○ 廖 運 藩

玉音に直立不動終戦日
玉音が衆庶を救ふ終戦日
玉音は勝敗に触れず終戦日
神風は到頭吹かず終戦日
山積の竹槍の束終戦日

○ 久米憲子

立秋や雲の形のととははず
髪切つて抗ふ秋暑ありにけり
新涼にさてと力の入りけり
遠き日の笑顔の中の西瓜かな
病む友の快癒を願ふ星月夜

○ 小倉陶女

押入れの奥の悪書や晩夏光
天国の夫の返信星流る
生身魂きつぱりと物申しけり
通勤の道や確かな処暑の風
雨過ぎて帰燕の空を眩しめり

○ 荒井 慈

新涼や墨の息づく書道展
狛犬のうしろ姿の秋暑かな
法師蟬涙で巻きし歌仙かな(禪・和・極)
鰐の背のやうな苦瓜真つ二つ
休暇果つ孫に越さるる背丈かな

○ 佐渡谷秀一

母の忌のどんより暮るる沙羅の花
朝顔や老いに似合はぬシャツ纏ふ
つくつくしパズルの解けず眼鏡拭く
盂蘭盆会こちらに坐するひとの数
湯の煮たつ厨の昏し秋簾

当月集

安立 公彦選



○ 遠汰鼓急く畦道や稲の花

今朝の秋景色を変ふる庭師かな

万葉の詠み人知らず秋の花

新涼やゆるりと伸ぶるヨガポーズ

友逝くや未完の画布へ秋の蝶

○ 持田 信子

○ 永井 恵子

爽やかや見知らぬ町のバスに乗り(舞鶴引揚気筒五句)

敗戦日封じ込めぬる記憶かな

赤紙もて決まる運命うそ寒し

舞鶴は帰還の一步葉鶏頭

舞鶴の海に父恋ふ秋の虹

○ 荒井 ハルエ

朝顔の藍の深さよ母の忌来

小流れの石に息づく秋の蝶

指笛に牛立ち上がる花野かな

小鳥来るそろそろパイの焼けるころ

路地に聞く佃囃子や夕月夜

○ 茂木 なつ

亡夫しのぶ姉妹の肴夏の牡蠣

香水一滴居眠る項おどろかす

豪雨それ雲間に大き夏の月

迎火や遠来の子の手に灯る

酔芙蓉ふるるな亡母の一張羅

○ 海村 禮子

凱旋門の上なる月を見上げをり

秋簾下駄を履きぬて取込みぬ

天の川口ケツトまはる空なるや

秋の山水を湛ふる金閣寺

花野行くこのしあはせを如何にせむ

春燈の句

安立 公彦選



ひとり焚く妻恋ふ闇の門火かな

神奈川 新海 英二

照れば金翳るや銀に秋の水

拝殿の祢宜の白足袋涼新た

一斉にひぐらし湧くや古墳山

旅の夜の湖上に揚がる花火かな

東京 池田 節

夕風に音なく落つる桐一葉

梶の葉に皆の幸せ書きにけり

広島を偲ぶ黙禱原爆忌

車渋滞待つ帰省子を案じ居り

埼玉 長谷 仁子

突然の訃報の届く日雷

盆棚組む亡夫の声の遙かより

畦道や負バツタ蟻蛸の手に止まり

晩夏光その輝きにある別れ

神奈川 落合 小枝

行きずりの背戸に秋の日みつけたり

風の盆もつとも美しき男舞ひ

秋日濃し潮の香のする貝を焼く

三伏や頭上を過るへりコプター

鐘涼し身ぬちに経の染み入りぬ

室内は片付けてあり暑氣中り

重ねある読みさしの本秋はじめ

秋海棠きのふもけふもあまもよひ

流灯の火影あやふし雨の岸

敗戦忌ひたにしづもる山河かな

撥りの笑み乙女さぶ百日紅

鳩鳴くな鳴くなよ今日は敗戦日

仰向けの鼓動かすかに秋の蟬

流灯や思ひの丈の重たさに

淋しさを分け合ふベンチ秋の夕

千葉 平沢 恵子

東京 小林 文良

千葉 田村 初枝

余言

安立公彦

風紋のことに清けき良夜かな(祝・和極) 岩永はるみ

この「風紋」は砂丘に観られる風の紋様であり、同時に先般上梓された高橋和女さんの句集『風紋』の題名である。私も序文を書かせて貰ったが、句稿の佳句に貼った付箋の作品から序文に引用する句の選択に嬉しい悲鳴をあげた。

この句、祝句としてその本質を良く押さえた作品だ。中七の「ことに清けき」は、風紋に懸かり、また「良夜」にかかる。風紋を括弧なしにしたのが、一句の表現を大きくしている。中秋の名月と風紋の取合せがみごとだ。

秋冷やぬくもり残る百度石

林 紀夫

「百度石」、懐かしい言葉だ。境内の広い社寺には、今も百度石が置かれている。私の住む地方の大神宮にも、裏門への途中の木陰に古い百度石がある。かつてそこでは、お百度参りが真剣に為されていたのだろう。

この句、「ぬくもり残る」が、一編の物語の舞台を見る

ようだ。それは多分に、百度石から受ける作者の感覚描写だろうが、「秋冷」と呼応するとき、その感覚描写に命が吹き込まれるのを感じる。写生の窮極の句と言えよう。

拭き終ふる皿を積む音秋の夜

太田佳代子

親戚かはた友を呼んでの祝宴があつたのだろう。愉しい宴も終わり、皆帰ったあとの厨。作者は幾つもの食器を拭き終え、それらの皿をかねての戸棚に積む。静かな夜の厨にその皿を積む音がかすかに透るのだ。

「拭き終ふる」の表現もいい。今述べた時間の経過が、この五文字に感じられる。「皿を積む音」と「秋の夜」のかそけさは、そのまま一家をつつむ姿であろう。日常の暮らしの中の句ごろを、みごとな表現で作品としている。

小鳥来る少女の赤き車椅子

松山三三江

この小鳥はつぐみだろうか。へ小鳥来る音うれしさよ板びさし 蕪村の句もある。歳時記は、「秋、日本に飛来する小鳥、また山地から平地に下りてくる小鳥を指す」と解説する。新涼を感じさせる季語である。

この句、「少女の赤き車椅子」がいい。車椅子に乗るということは、その少女の体調不全か、長い入院生活で体調

が快方に向かい、今日は車椅子で外気を吸う、と言うことかの何れかであろう。この言わば入院という社会との隔離の雰囲気や、「赤き」が爽やかに変えている。更に「小鳥来る」が、少女の車椅子をやさしく包む。

来ましたと声かけ墓を洗ひけり

中村紀美子

上五の口語調が一句を目前の景とさせている。この語りかけの相手は、亡き夫君か母堂か。「来ましたと声かけ」は、個人とのかつての日常の対話である。

墓参りはつい日常の用事にかまけて間遠になりやすい。「来ました」には、対話とともに、故人への詫び入る思いも感じられる。その素直な表現は、一脈の明るさに包まれているが、「墓を洗ひけり」は故人と向き合う姿勢と言えよう。この句はそういう深い思いを宿す一句である。

墓洗ふ父母に阿弟に詫びいくつ

赤岡 茂子

今月は墓参の句が多かった。それぞれの墓参の句には、それぞれの思いが宿る。この句もその一つである。

「阿弟」は弟の愛称。この「父母に阿弟に詫びいくつ」は、久しく墓参りに来なかったという詫びの思いだ。作者は九十歳代の半ばになられる。墓地の在り処は、大方が遠い地にある。簡単には行けない。だが、「詫びいくつ」に作者の、

父母や阿弟への感謝の思いは充分に読みとれる。墓地の在り様も変わって来た。しかし故人の眠る墓地は、いつまでも全ての人びとと共にあつてほしい。

アトリエに残る下絵や秋深む

木村 梨花

この「下絵」は、去る四月二十五日急逝された木村裕己さんのもの。文字通りの急逝だった。そのアトリエに他にも幾つかの下絵があつたのだろう。春燈誌の表紙を飾るという思いを、「いろいろと迷いながらも、楽しく作業させて頂いています」と、前向きに書かれていた。

「アトリエに残る下絵」に見入る作者の姿は、言葉では表現出来ない思いに包まれている。「秋深む」が切ない。

草引くとふさびしきことを原爆忘

齋藤 晴夫

夏の雑草の茂りは、場所を問わず茂りに茂るばかり作者もそういう一日、庭の雑草を抜いている。ふと遠く過ぎ去つた八月六日のことが、脳裡に浮かんで来た。終戦を経験したことのある人なら、八月は例えようもなく、忘れることの出来ない月である。草を引くという単純な作業故、思いは拡がるばかりだ。「さびしきこと」は、その思いが、今の我が身に還つて来たのだ。このこと感情の吐露ではない。ただ果てのない深い思いである。